

専門分野/この1年の進歩

日本足の外科学会——この1年の進歩

井 口 傑

臨床 整 形 外 科

第34巻 第11号 別刷

1999年11月25日 発行

医学書院

■ 専門分野/この1年の進歩

日本足の外科学会*——この1年の進歩

井口 傑**

第24回日本足の外科学会は、1999(平成11)年6月18日(金)、19日(土)の両日、東京・品川のココヨホールで行われた。今回は初めての試みとして、毎年秋に行われている日本靴医学会(第13回)を、前日の17日(木)に同じココヨホールで開催した。関連の深い両学会の会員の交流を図るとともに、学会に費やす時間の節約を試み、一応の成果を得ることができた。

■ 今年の日本足の外科学会のトピックス

今年の足の外科学会では、「足関節外側靭帯損傷の長期予後」「外反母趾のサルベージ手術」「中足部の新鮮外傷」「鏡視下手術」をシンポジウムとして採り上げた。外側靭帯損傷の治療目的は変形性関節症の防止にあるが、保存療法から再建術まで長期の追跡調査は意外と少ない。骨軟骨損傷も含めてほとんどの研究者が一応の成績を報告しているが、診断基準、評価基準を整備し、学会として一つの治療基準を作る必要がある。外反母趾は中枢、末梢いずれの中足骨矯正骨切り術によっても良い成績が報告されているが、再発と転位性中足骨骨頭部痛に対する解決策は示されていない。今後、治療期間の短縮が急務の外反母趾に対して、サルベージ手術は増加の傾向にある。中足部の外傷を代表するリスフラン脱臼骨折は異常可動性と変形を残すと疼痛を生じ成績が悪化している。再転位する症例では観血的整復固定が必要となる。鏡視下手術は足関節の骨軟骨損傷を中心に急速に普及してきたが、さらに距骨下関節、MPT関節、踵骨棘など適応が拡大している。外科系全てが鏡視下手術による小侵襲手術に向かっているが、足の外科においても関節腔以外への応用が進みつつある。

■ 日本足の外科学会の国際化にとって重要な進歩の1年に

日本足の外科学会にとってこの1年は、国際化にとっても重要な進歩の1年であった。3年前に鈴木良平会長(Congress President)(長崎大学整形外科名誉教授)により第20回国際足医学・足の外科学会(XXth Congress of the International College of Medicine and Surgery of the Foot : CIP)が1999(平成11)年10月に京都で開催されることが決定した。同時に高倉義典 CIP 次期会長(CIP President elected)(奈良県立医科大学整形外科助教授)も決まり二重の喜

* 1999年6月18~19日、東京

** 慶應義塾大学医学部整形外科、第24回日本足の外科学会会長

びであった。この1年間、鈴木会長、高倉事務局長を中心に10月13～16日の開催に向け着々と準備が進んできた。演題の申し込みも予想以上の盛況で、青木治人プログラム委員長(聖マリアンナ医科大学整形外科教授)の基で、学会プログラムの編成も完了した。また、第4回日英足の外科合同会議がCIPの第2日(10月14日)に予定され、2000(平成12)年の6月にはスペインのサラマンカでの日本-スペインの足の外科合同会議も決定されている。

ところで、このCIPは今回を最後にIFFAS(International Federation of Foot and Ankle Societies: 国際足の外科学会連合)として、発展的に解消することになっている。紆余曲折があったが、個人加入が原則であったCIPに各国の学会単位で加入するIFFASが取って代わり、足の外科の国際組織となる。これに対応して、日本足の外科学会も学会としてIFFASに加盟することを決定し、日本CIPは解散した。IFFASは北米、ラテンアメリカ、ヨーロッパ、アジアの4地域における各国足の外科学会の連合体から成るとされるが、北米地区=米国足の外科学会(AOFAS)であり、従来のラテン系中心から、米国主導型の国際組織になると予想される。アジア、アフリカでは足の外科どころか整形外科の学会さえ無い国があり、IFFASへのアジア地区分担金を日本が全額負担している現状から、アジア、アフリカ諸国における足の外科の組織化が急務と思われる。

2000(平成12)年6月30日、7月1日の両日、東京・新宿の京王プラザホテルで今給黎篤弘会長(東京医科大学整形外科教授)の基に開かれる第25回日本足の外科学会に向けての次の1年が期待される。